豊臣家は何故滅びたのかについて語ります

{目次}

１，　秀吉の失敗
２，　淀の失敗
３，　秀頼の失敗
４，　淀・秀頼の相談役たちの失敗
５，　主戦派の側近たちの失敗
６，　大坂冬の陣和議条件の選択の失敗
７，　大坂夏の陣を取りやめなかった失敗
８，　合戦後の相談役
９，　結論

豊臣家はご存じのように大坂の陣で敗戦壊滅して秀吉の跡取り息子秀頼は自殺して豊臣家は血筋が途絶え、以後歴史から消えてしまいます。

秀吉が死後を託した五大老、五奉行制は機能せず、徳川家康の政権奪取の方向へ進みます。

何故このようになって行ったのかを推考してみたいと思います。

１，秀吉の失敗

甥（姉の子）の秀次を跡取りに決め、関白職を譲ります。そこに秀頼が生まれます。

秀吉は我が子秀頼に後を継がせるために秀次を謀反と言うことで殺してしまいます。

豊臣家は秀次という大人の後継者いなくなり、秀吉は死んだ後を８歳の秀頼が成人するまで大老徳川家康と大老前田利家（加賀）二人を後見人とせざるを得ませんでした。

しかし利家が直ぐに没した後は家康の独り舞台となります。

もし秀次が生存していたら秀吉没後の展開は家康独り舞台でなく、いえ豊臣家の政権が続いた可能性は大きかったと思われます。

秀次を殺さず、秀次の後に秀頼を後継ぎにと考えるべきでしたでしょう。

近世以前から上流階級では幼少の若君には乳母と正室と傅役（教育係）がつきます。乳母は通常５～６歳で辞します。側室の子であっても教育担当は正室です（正室は自分の養子にする場合もあります)。

傅役には教養豊かな譜代の家来がつきますが、元服とともに職を辞します。

父親が早く死に若君が元服（成人）前に君主（当主・城主）となった場合は叔父か譜代の重臣かが後見役になり政務をみます。

戦国時代はこの後見役制度がうまく働かない場合が多いのです。兄弟間、重臣間で主導権争いから君主の地位の争奪戦が行われます。スムースに嫡男に継承されないことがあります。

元服前（成人前）の君主ではお家存続が危ぶまれるのです。

織田家も信長の後は長男信忠が決まっており、二人が同時に亡くなったので信忠の嫡男三法師（秀信）となるのが順序です。実際にそのようになりました。

３歳の三法師が当主で、織田政権を引き継ぐことになるのです。

しかしそうはなりません。織田宗家の当主にはなりましたが、秀吉が織田政権を奪取しました。織田家の面々も成人した秀信（三法師）も文句を言いません。世間も非難しません。

秀吉が８歳の秀頼に豊臣政権を継がせることは容易ではないことは分かっていたはずです。

結果的には秀次を殺してしまったことは失敗でした。

更に秀吉の失敗です。

秀頼の子育てを自分の死後も淀（茶々）にさせたことです。普通は正室（政所＝ねね）の仕事です。

秀頼には乳母をおかず、淀に直に養育させました。

これが淀と秀頼との母子は親離れ、子離れしない相互依存型となり、秀頼と淀は一対で、秀頼は成人後も自立出来ませんでした。

これが豊臣家存続出来なかった大きな要因です。

２，淀の失敗

関ケ原の戦い（１６００年）後数年は家康が政権を豊臣家に戻してくれる思い、豊臣恩顧の大名も挨拶に大阪城に来てくれるし、家康の律儀を信じて期待していました。

１６０５年、秀忠が二代目将軍に就任しました。家康は徳川政権を世襲に

するための体制強化を打ち出しました。
大坂の秀頼に上洛している秀忠に就任挨拶を求めます。淀は拒否します。
挨拶は臣下になる意味があるからです。家康は強制しませんでした。
しかしその後、家康は大名に徳川体制傘下を強います（江戸城の城普請の割り当て等)。
大名たちは徳川体制に組み込まれていきます。
誰も大坂城の秀頼に挨拶に行かなくなります。

家康は豊臣家を徳川の家臣にする方向に向かいます。
１６１１年、６年ぶりに上洛した家康は秀頼（１９歳）に京で面談しようと呼びかけます。
この頃は豊臣シンパの加藤清正も浅野長政・幸長親子も生きており、彼らは情勢からして家康に挨拶に行かざるを得ないと考え、淀・秀頼親子に自分たちがお供について行くからとさとし、両者は京で面談となりました。
面談は秀頼よりのその場の提案で家康が上座で、秀頼が下座になりました。
これで秀頼が家康の臣下になったとの見解もあります。しかしその後の親子の振舞からみてそうだとも言い切れないと思います。
家康は秀頼を見てその立ち振る舞いが立派なのに驚きました。女の園で軟弱に育っていると思っていたからです。
淀はしっかり教育していたのです。
無事面談は終わりました。
家康は豊臣家対策を深刻に考え始めました。

この面談の後のその年に豊臣家恩顧の大名で関ヶ原の戦いの時に家康に貢献した加藤清正、浅野長政、翌年には浅野幸長が亡くなります。
家康はもう遠慮する大名は同じく豊臣家恩顧の大名福島正則位ですが、一人ですから何とかなるとの思いです。実際に正則は何も出来ませんでした。
その後しばらくは家康は豊臣家に無理を言いません。親子はもう政権が徳川家から戻るとは思わなかったでしょうが、「豊臣家が特別の存在で徳川の臣下ではない」との強い認識があったのです。淀は両者は並立関係にあると思ったでしょう。
秀頼の正室には二代将軍秀忠の娘千姫が嫁いでいきます。安心感はいくらかはあります。

しかる所に１６１４年７月に家康によって方広寺鐘銘事件がでっち上げられます。

秀吉ゆかりの方広寺再建は費用は豊臣家で、施主は豊臣と徳川両家です。もう竣工間近かの時に鋳造された梵鐘の銘の中に「国家安康」の文字があり、国と安で家康を分断する意図があると因縁をつけます。徳川の御用学者林羅山が家康に教えました。

豊臣方のそんな意図がないことは明白で、京都五山の高僧たちもそんな意図は感じられないとの見解です。高僧たちは豊臣寄りでも徳川寄りでもない人たちです。

豊臣の家老片桐且元が釈明のため駿河の家康を訪ねます。家康は会わず家臣の本多正純に対応させます。

徳川からの注文は次の通りです。次の条件から一つ選べと

〇秀頼は大坂城を明け渡して他国に国替え

〇秀頼が駿府、江戸に参勤する

〇淀が人質として江戸に詰める

内容的には豊臣家は一般大名並になり、徳川家の家臣になれとの意味です。

一方、淀・秀頼親子は且元とは別に大蔵卿局（おおくらきょうのつぼね）（淀の乳母）を使節にして家康のもとに送ります。家康は面談します。

「何も心配することはない。安心しなさい」と家康からの言辞を得ます。

両者が帰って親子や側近の前で報告され協議します。

内容のあまりに違いがあり、混乱しますが大蔵卿局の報告が採用されます。

側近たちが且元を虚偽の報告をしたとして豊臣家への裏切りと見ます。

且元を城内で暗殺のうわさが立ちます。

且元は大坂城から領地の茨木に逃げます。

家老が逃げてしまったのです。後の家老には大野治長（大蔵卿局の息子）をすえます。

しかし直ぐに且元の報告が家康の真意であると分かります。

親子は、政権は本来豊臣家であり、徳川は豊臣の家臣であるとの自負が未だありました。

徳川側の提示条件はすべて飲めないとの返事です。

大蔵卿局は淀の乳母で治長は大蔵卿局の長男です。

同年１１月に大坂冬の陣に突入することになります。

３，秀頼の失敗

秀頼は教養においては又貴族としては立派に育ちました。しかし淀から乳

離れ・親離れできていない、自立できなかった仁だったのです。
　徳川政権は盤石になってきており、もう政権が豊臣へ戻ることは無理か、しかし家康が死に秀忠になればチャンスはあるかの思いはあったかも知れません。
　ならば家康からの条件を飲むべきだったです。
　老齢の家康を見て時間稼ぎをするならば淀の江戸への人質の条件を飲むことでしょう。
　戦国時代、母親を人質に出すことは普通です。戦になって殺されることもあります。戦国の世の習いです。
　織田信長の三男信孝は秀吉に生みの母親を人質に出した後、秀吉に対抗して母親は秀吉に殺されました。
　五大老の一人前田利家の息子利長の母親まつは、家康に自ら人質になって江戸に下り、お家存続を図りました。
　これはこの時代の武家のならいです。

　戦国時代の武将としての自立とはそうゆう厳しさを持たねばなりません。
　しかし母親を思う秀頼は、それは絶対取れません。これは豊臣側も徳川側も世間一般も知っていました。
　豊臣側の最大の弱点はここにありました。

４，淀・秀頼の相談役たちの失敗

　秀頼・淀親子の相談役として、織田信包（のぶかね）、織田有楽斎、織田信雄、それに常高院ですが,信包は冬の陣の前に亡くなります。
　信包は信長の弟で、母親の市も淀をも後見人でした。
　信雄は信長の二男で、秀吉に逆らって小大名に格下げ、家康とは関係が良い人です。
　有楽斎は信長の弟で、家康とも関係が良い。
　常高院（初）は浅井三姉妹で、長女茶々（淀）と三女江（二代将軍秀忠の正室）の間の二女で、亡き京極高次の正室で、家康からも信頼があった女性で、高次も跡取りの忠高も徳川方の大名にしています。
　この相談役についてです。
　４人とも家康との関係が良いのです。豊臣方の家来でなく両者の間を取り持つ役回りであったのです。
　４人は戦でなく話し合いで豊臣家存続の道を探り、淀に譲歩を求めたでしょう。

浪人で名の知れた元武将を集めても、戦をすれば敗戦の確立は大きいことは分かっています。

豊臣恩顧の現役大名は誰も豊臣方にならず、皆徳川方となったのですから。

それでも関ケ原で敗れて取り潰された大名やその後浪人となった長曾我部盛親、後藤又兵衛、仙谷秀範、明石掃部助、真田信繁（幸村)、毛利勝永（長州の毛利とは関係なし）等当時知られた浪人武将が集まりました。

大将には戦歴が華々しい織田信雄が押されそうになったところで、信雄は城を去って徳川方につきました。

織田信包は開戦（１６１４年）３カ月前に病没しました。

織田有楽斎と常高院は残りました。いくらかでも勝ち、戦線膠着状態になるかもしれない。その時に和議で現況を乗り越えたい腹であったでしょう。

相談役の４人は、家康の条件を飲んで豊臣家の存続を図ろうとしたでしょう。

淀・秀頼親子は家康の提示条件を認めません。徳川の家来ではないとの強い意識です。

合戦になってしまいます。

５，主戦派の側近たちの失敗

それでは誰が家康と妥協しないで徹底抗戦を主張したのでしょう。

それは豊臣家直臣で秀頼の側近の家来たちです。

大野治長・…淀の乳母大蔵卿局の長男、関ケ原の戦いでは東軍

治房・…淀の乳母大蔵卿局の息子

治胤・…淀の乳母大蔵卿局の息子

鎌田兼相・…秀吉馬回り

木村重成・…秀頼の乳母宮内卿局の息子

ほとんど淀関係の人脈の男たちが主戦派です。その外にも主戦派はいたでしょうが有名人はいません。

戦歴は、大野治長はあるでしょうが、外の人はたいしたことはありません。

何千、何万の大軍を指揮した経験はありません。

大野治長は関ケ原合戦で家康についたぐらいですから家康の戦での実力は知っていました。最初は開戦に反対だったのが、強硬派に押されて立ち上がってしまったと言う説もあります。

大野治長が身を挺して開戦を止めるべきだったでしょう。

６，大坂冬の陣の和議条件選択の失敗

家康との妥協を求めた相談役の織田有楽斎と常高院が残りました。この二人は豊臣家存続のために和議の時の交渉役として残ることになります。

大坂冬の陣は１６１４年１１月１８日戦闘開始です（当時は陰暦で１０~１２月が冬です)。

軍勢は豊臣方１０万人、家康方２０万人と言われています。

豊臣方は戦歴豊かな浪人武将にまかせざるを得ません。

最初の戦場は大坂城の南側の河内平野でしたが､多勢に無勢で豊臣方は押されて大坂城に立て籠もって戦うことになります。

真田勢が真田丸（大坂城の南側）で奮闘しますが、徳川勢が大筒２００門で城の御殿を攻撃し、侍女たちに死傷者がでます。徳川勢が穴を掘って地下から進入するとのうわさも聞きます。

家康からの和議の申し出に乗ります。

和議交渉は１２月１８・１９日で、２０日で整います。

この交渉は歴史上めずらしく交渉団トップは両者とも女性です。

豊臣方は常高院(初)で、徳川方は阿茶局（家康側室筆頭で秘書室長的存在です)。常高院は家康の指名でもあります。会談場所は京極忠高の陣所です。

忠高は常高院の亡き夫高次と側室との子ですが､初が養育責任者として育てた若狭藩の二代目藩主です。関ケ原合戦以来京極家は徳川方です。京極家の再興は常高院と高次の姉松がなしたお家で、実質常高院が当主とも言えます。

常高院は姉の淀の相談役でもあり、家康からも信頼されていました。

和議は、

〇大坂城は本丸だけ残し、二の丸、三の丸は破壊する（堀も埋める)。

〇淀殿（茶々）を人質として江戸に取ることはしない。

〇大野治長と織田有楽斎の二人からはそれぞれ息子を人質に出す。

１２月２０日常高院、二位局(にいつぼね)、饗場局(あえばのつぼね)が代表となり家康本陣で誓書を受け取り、２２日に阿茶局が大坂城で秀頼から誓書を受け取り和議が成立しました。

要するに大坂城は裸城となり、城としての機能は無くなりました。

大坂城を裸城にすることは全面敗戦降服です。

この和議には浪人武将は関与させられなかったでしょう。

淀が人質に行くことを徳川方が提案したとしても聞かれなかったでしょう。

淀の人質が条件にないことがこんな敗北の条件を飲むことになったのです。

7，大坂夏の陣をとり止めなかった失敗

大坂城が丸裸になれば、家康は豊臣側に更なる注文を出せます。

「秀頼は大坂城を出て大和か伊勢へ転封するか、又は浪人を放逐せよ。」

豊臣側から「応じられないと」と回答。

豊臣側の内情

大坂城が堀もなく裸城で、兵員も半分の５万人になり、戦えば破れかぶれの戦いになることは明らかです。

淀や女たちは家康の条件を飲もうと思ったでしょう。織田有楽斎は自主的に坂城を脱出します。親子の相談役は常高院だけです。

常高院も家康の条件を飲もうと説得したでしょう。

しかし招集した浪人の有名な武将たちが承知しません。

もう彼らは勝ち負けではありません。死に花を咲かせて散るだけを思っているのです。戦国時代は終わろうとしています。外に主を求める先はありません。

秀頼親子の行く末や豊臣家の存続などは頭にないのです。もともとは、秀吉の外様かまたはその家来の筋です。

家康に一泡吹かせたい、それで死んでも構わないとの思いです。

いつでも主戦派は強いのです。浪人を説得することはもはや出来ないのです。

豊臣一家は反論できずに戦闘準備に入ります。

豊臣側は浪人の兵を新規採用します。

徳川側は大名に召集をかけます。家康は駿府から大坂へ向かいます。

常高院・大蔵卿局は名古屋で家康と面談するも交渉は決裂。

更に京の二条城で常高院と二位の局に対し家康より「秀頼の国替えか、浪人放逐かを選べ」と最後通牒です。

大坂城はないに等しいのです。お家の存続には飲むしか仕方がないのです。

浪人が承知しません。

豊臣方は黙殺して、戦闘開始になります。冬の陣の翌年です。

大坂夏の陣の開戦です（当時は陰暦で夏は４~６月です)。

短期戦でした。軍勢は豊臣側５万人、徳川側２０万人と言われています。

もう大坂城は裸城で防禦の機能はありません。

１６１４年４月２６日から大坂城の南側の河内平野で戦闘開始で、豊臣側は真田幸村や後藤又兵衛などの勇将が戦死し、５月７日には本丸を包囲されました。

淀、秀頼、大野治長ら側近の臣や侍女が本丸千畳敷から山里曲輪の糒庫（ほしいくら）に移りました。２８名になっていました

大野治長は家康の孫、秀頼の正室の千姫を徳川側に落とし、秀頼と茶々の助命嘆願をしました。

常高院は、落城前日に淀と秀頼に暇乞いをして、大阪城を脱出することにしました。

徳川側は兵卒に至るまで常高院が家康と茶々・秀頼の仲介の労を取ってきた人であることを知っていました。

無事脱出しました。

淀、秀頼外大野治長等近臣は翌日自殺しました。淀４７歳、秀頼２３歳でした。

家康は助命嘆願を認めませんでした。

豊臣家は断絶、完全滅亡です。

秀頼の側室の子ではなかと言われていた８歳の男子が殺されました。

側室の間に女の子千姫がいました。常高院の助命嘆願で命は助けられ、鎌倉東慶寺で尼になり東慶寺二十世になりました。

7，合戦後の相談役

家老の片桐且元は主戦派に狙われ冬の陣前に大阪城から逃げます。大坂の陣では徳川側につきます。この人は秀吉の直臣で頼りに出来る人でした。

片桐家は江戸時代にも続きますが、本人は夏の陣後の６月に没します。

豊臣側には淀・秀頼親子には相談役として、叔父の有楽斎、従弟の信雄それに淀の妹の常高院が」いました。

彼らは家康との妥協を求めますが、親子は応じません・

信雄は冬の陣前の講和決裂後に城を去ります。

有楽斎は冬の陣後自主的に退城しました。夏の陣後も家康に処遇されます。

常高院は落城前日まで淀・秀頼親子に付き添いましたが、城から脱出しました。

常高院はその後江戸で暮らします。京極家の藩主の母堂としてです。姉で２代将軍秀忠正室の江の没した後１６３３年６４歳で没します。生前江戸で二人はよく会ったそうです。

どんな話をしたのでしょうか。

相談役の彼らは淀・秀頼親子の家来ではなく、所領は家康から安堵されており、親子と一緒に殉死する立場にありませんので裏切り行為と言えません。
真剣に豊臣家存続を考えていたでしょう。しかし親子と心中する立場にはないのです。

9，結論

それでは豊臣家は何故存続できなかったのかをまとめて見ましょう。
基本的には淀が家康を律儀な人と思い、当初は政権を返してもらえる、もらえなくても徳川の家臣でなく特別待遇の大名として遇してくれると考えたことです。豊臣家の主筋意識を脱ぎ去ることが出来なかったのです。
家康はそんなお人よしではありません。
秀吉が生きている間は律儀な好々爺を演じていたのです。
幼子の当主が政権を、家を存続させることは当時大変なことです。秀吉は一旦家督を譲った甥の秀次を殺してしまいました。生かして子の秀頼が成長してから家督相続を考えるべきでした。
幼子秀頼を家康と前田利家体制が支える体制を遺言しましたが、利家は秀吉没後すぐに病没します。
家康が政権を樹立します。
家康は臣下の礼を取らせようとしますが、淀と秀頼親子は従いません。
二人が一番受け入れられなかった条件は二人の引き離しです。秀頼の江戸への参勤又は淀の江戸での居住（人質）です。
これは家康がすべての大名に実行している大名統治施策です。
淀と秀頼親子は親離れ、子離れできない一対の二人でした。
大阪の陣となります。
冬の陣ですでに敗退していることは明白にあるにかかわらず、夏の陣に突入します。もう破れかぶれです。
豊臣家は全滅です。

何とか豊臣家の存続を考え、両者の間に入って調停をした常高院（淀の妹）、織田有楽斎（淀の叔父）等の努力は実りませんでした。

以上

２０２２年１１月１４日

梅　一声